



前衛芸術と古典主義

1880年～1945年

Avant-garde Art and Classicism
from **1880** to **1945**

23-24 Sep. 2017

会場:名古屋大学文系総合館7階 カンファレンスホール
Nagoya University (Conference Hall, Integrated Research Bldg. for Humanities & Social Sciences, 7F)

PROGRAM

1st Day 23 September (Sat.)

13:00- 開会 Opening

13:15-16:15 基調講演

Key-note lectures

司会: 松井裕美(名古屋大学特任助教)

Facilitator: **Hiromi MATSUI** (Nagoya University)

デイヴィッド・コッティントン(キングズグトン大学教授)
「バック・トゥー・ザ・フューチャー? 前衛, 古典と
〈後衛〉の概念」(英語発表)

David Cottingham (Kingston University, London),
*Back to the future? Avant-gardes, classicisms and the idea of an
arrière-garde* (English)

河本真理(日本女子大学教授)

「前衛／古典主義の相克: 両大戦間期の美術を
めぐって」(フランス語発表)

Mari Komoto (Japan Women's University)
Avant-garde/Classicisme en conflit. L'art entre deux guerres
(French)

久保昭博(関西学院大学教授)

「古典主義への回帰はモデルニテのパラドックス
か?」(フランス語発表)

Akihiro Kubo (Kwansei Gakuin University)
Le retour au classicisme est-il un paradoxe de la modernité?
(French)

16:30-17:30 Session I

古典主義と第一次世界大戦 Classicism and
World War I

司会: 吉澤英樹(南山大学教授)

Facilitator: **Hideki Yoshizawa** (Nanzan University)

松井裕美(名古屋大学特任助教)

「《切らずに開いて》: 時間と歴史のキュビズム的
形態学」

(英語発表)

Hiromi Matsui (Nagoya University), *"Ne coupez pas, dépliez"*
History of Cubism and the First World War (English)

池野絢子(京都造形芸術大学准教授)

「カルロ・ Carrà: プリミティヴィズムと古典主義のあ
いだ」

(英語発表)

Ayako Ikeno (Kyoto University of Art and Design), *Carlo Carrà:*
Between Primitivism and Classicism (English)

2nd Day 24 September(Sun.)

10:30-12:30 Session II

大戦間期の古典主義 Classicism in Interwar
Period

司会: 鈴木雅雄(早稲田大学教授)

Facilitator: **Masao Suzuki** (Waseda University)

飛嶋隆信(東京農工大学准教授)

「両大戦間フランス美術における危機と伝統」
(フランス語発表)

Takanobu Tobishima (Tokyo University of Agriculture and
Technology), *Crisis and Tradition of French Art in Interwar Period*
(French)

木水千里(お茶の水女子大学特別研究員)

「シュルレアリスムと古典主義」(日本語発表)

Chisato Kimizu (Ochanomizu University), *Surrealism and
Classicism* (Japanese)

利根川由奈(早稲田大学非常勤講師)

「反-肖像画: ルネ・マグリットによる過去と現在の
表象」

(英語発表)

Yuna Tonegawa (Waseda University), *Against the Portraits: the
Representation of the Past and the Present by René Magritte*
(English)

-12:30 閉会 Cloture

The objective of this symposium is to reconsider the relationship between the avant-garde and classicism in art and literature from 1880 to 1945. Most generally, the avant-garde culture has been considered a negation of the traditional western art, and classicism in 20th-century art as “*arrière-garde*” , as opposed to avant-garde. In the same way, the classical tendency that became manifest during and after World War I, namely “*retour à l’ordre*” (return to order), is also understood as a reaction against the avant-garde movement that emerged before the war. However, if the breakup with the past was one of the important elements in avant-garde culture, it was also significant to face the past, challenge it, and even create its own “classic” for 20th-century artists. This symposium is based on the question: “How is ‘classic’ defined in the 20th century?” It aims at further understanding the relation of each artist with the past. By reconsidering the “classic” and “classicism” of 20th-century cultural phenomena and its relationship with the notion of time, history, and community (city, race, nation), we will try to uncover a new historical perspective that might be more complex than the simple schema of the confrontation between avant-garde and classicism as *arrière-garde*.

本シンポジウムの目的は、文学と芸術の枠組みを越えながら、19世紀末から20世紀前半までの西洋芸術における前衛芸術と古典主義の関係を再考察することである。今日まで、前衛芸術は一般に伝統を否定するものとして考えられる傾向にあった。こうした観点から、20世紀芸術における古典主義は、「前衛」に対する「後衛」として定義されてきた。第一次世界大戦後に顕著となる「秩序への回帰」もまた、戦前の前衛芸術に対する反動的な動向として理解される。このように過去との決別が前衛芸術におけるひとつの重要な要素であったとすれば、他方では、過去と向き合い、挑戦すること、新たな「古典」を創出することもまた、同様に芸術家たちの課題とされた。そこで本シンポジウムでは、20世紀において実際に「古典」がどのように規定されていたのかという問いを共有しながら、個々の芸術家・文学者が過去とのあいだに築き上げていた関係を今一度より深く理解することを試みる。20世紀の文化的諸事象に認められる時間感覚、歴史観、共同体意識(都市・民族・国家)の多様性に注目しながら「古典」と「古典主義」を当時の文脈に置き直して再検討することで、「前衛」に対する「後衛」としての古典主義という図式とは異なる美術史的、文学史的な地平が開かれるだろう。

バック・トゥー・ザ・フューチャー？ 前衛、古典と「後衛」の概念

デイヴィット・コッティントン(キングストン大学教授)

ヨーロッパの最初の四半世紀における前衛芸術の古典芸術および古典主義への関与を主題とする本発表では、古典芸術と古典主義の関係性と、このふたつの用語がモダニズムと結んでいた関係を検討する。この問題を扱う際、多くの研究者はこうした関係性が「後衛」という概念やその関心と切り離せないものとして考えてきた。こうした考察は近年「前衛研究」の副次的なテーマとなっている。だが「後衛」という概念—さらにはこの名詞が前衛という概念から独立した歴史のなかで形成される、ないしは形成されたという発想—は疑問を残しており憶測の域を出ない。というのもそれらは、断絶のうえに基盤を置きながらユートピア主義のイデオロギーに駆られたものとして前衛芸術がみずから提示した定義を額面通りに受け取っているからである。

本発表が明らかにするように、このような定義がとらえるのは前衛の真の姿の一面でしかない。別の一面では、その布陣、その芸術の全体は、ユートピア的なイデオロギーの産物であるだけでなく、動的な相互作用の中で偶然に集まった少数派の芸術家たちを、結束力のある、時には文化を転覆させる潜在性を備えながら思想を共有するコミュニティへと変えるような、偶発的な要因の産物でもあったのであり、またそうであり続けているのだ。こうした変化はまず19世紀末のパリでおこり、続いてヨーロッパ全体の都市に広まった(そして最後には世界に広がる)。このコミュニティは、1880年代から1930年代の西洋世界におけるプロフェッショナル化のプロセスにより形成された複数の職業的な布陣のひとつだった。しかしながら前衛のプロフェッショナル化は、自由な資産階級たちの主流からみずからを区別するようなオータナティヴな性質を持っていた。それは次の三つの本質的な特徴に立脚していた。すなわち、美学的な原理の主張(と論点)、独特かつ共有された美学の継承とそれに基づく技法的な革新への傾倒、そして主流に対立することを中心に据えた集団としてのアイデンティティーである。

このように理解された前衛との関係の中でこそ、古典美学や古典主義への前衛の関与を考察しなければならない。それはユートピア主義の勢いを借りて存在を確立しようとした前衛でもなく、また過去との断絶に立脚した前衛でもなく、上記で述べたようなイデオロギー的要因と偶発的要因のあいだの相関関係の結果として取られた立場の集合としての前衛なのである。

本発表が明らかにするように、クラシカルとクラシズムというふたつの語は、相互に関連する一方で決定的に異なるものでもある。「前衛的古典主義」という表現はほとんどつねに撞着語法であるのだが、前衛芸術の古典的な美的性質への関与は必ずしもそうではない。ピカソや他の芸術家たちが第一次世界大戦後にすぐさまこうした性質に関与したように、特定の芸術家がクラシカルないしはクラシズムに対して取った立場についてのあらゆる所見が、それらの結束地点における前衛の布陣の機能範囲についての認識、また芸術家の実践との結びつきについての認識に根ざしていたということを示す。

[翻訳:松井裕美]

前衛／古典主義の相克 両大戦間期の美術をめぐる

河本真理(日本女子大学教授)

第一次世界大戦中から両大戦間期にかけて「秩序への回帰」と呼ばれる動向が顕著になるが、それは単なる前衛から古典への回帰を意味するのではないことが明らかになってきている。古代ギリシア・ローマ時代に制作された芸術の様式を指すのみならず、そうした特定の時代を超えた超時間性を獲得し、秩序と統一性の象徴と見なされるようになった古典主義と、過去との断絶、「進歩」のイデオロギー、破壊の衝動などを特徴とする前衛芸術は、一見対立するよう見える。しかしながら、過去の否定であるはずの前衛も、次世代に継承されていくことによって「後衛」に転化し、逆説的に一種の古典性さえ帯びていく(ドイツ語圏では、第二次世界大戦前の前衛美術を「古典的近代Klassische Moderne」の美術と呼んでいる)。また、幾何学的秩序という共通項によって古代芸術(建築)とマシーン・エイジの芸術が結びつき、前衛的技法と考えられているコラージュ／フォトモンタージュに古典的モチーフが導入される場合もある。このように、前衛芸術と古典主義は相克しつつも、共通項を持ち、錯綜した関係を取り結んでいるといえよう。この関係がとりわけ両大戦間期に緊張を孕んでくるのは、全体主義などのイデオロギーとも関わってくるからである。

また、前衛／古典主義の考察において、プリミティヴィズムの時間軸・空間軸も欠かせない。本講演では、フランスのみならずドイツやロシアなどの「秩序への回帰」に見られるこれらの軸の交錯を再検討する。

キーワード: 前衛、古典主義、プリミティヴィズム、秩序への回帰、フォトモンタージュ

古典主義への回帰はモデルニテのパラドックスか？

久保昭博(関西学院大学教授)

本発表の目的は、世紀転換期から20世紀前半のフランス文学史に見られる古典主義と前衛の関係について、ひとつの見取図を提示することである。「後衛」や「アンチモダン」、あるいは第一次世界大戦期の「秩序への回帰」に関する研究などによって、近年、「古典復興」や「新古典主義」を標榜した運動が再評価されつつある。これらの運動に視座をすえ、そこから前衛を見直すことで、文学史を再検討する可能性が拓けるのではないだろうか。

過去に視線を向ける古典主義と未来への信仰によって特徴づけられる前衛は、一見すると正反対の方向を向いた相容れない概念であるように思われる。だが、前衛の旗手でありながら「伝統」を擁護したアポリネールのうちに象徴的に見られるように、古典主義と前衛はしばしば遭遇し、交差し、手を結ぶ。こうした逆説的な関係はいかにして可能となるのだろうか。これらの現象を考えるうえで重要なのは、古典回帰と前衛が、ともに美学的運動であると同時に政治的運動でもあったということだ。古典復興運動が担った愛国主義とそれに対する前衛運動の反応、大戦と「戦争文化」の影響、文学と政治をあえて切り離そうとした『新フランス評論』の「現代的古典主義」などを確認しつつ、それぞれの局面で露わになる美学と政治を明らかにしてゆきたい。

キーワード: 反ロマン主義、文学の自律性、第一次世界大戦

「切らずに開いて (Ne coupez pas, dépliez)」 時間と歴史のキュビズム的形態学

松井裕美 (名古屋大学特任助教)

キュビズムの古典主義を支える三つの要素があるとすれば、第一に自然の理想化、第二にそうした理想化の方法に独自性を与えるような科学的知識からの着想、第三に芸術家たちが伝統との連関を主張する際の政治性が挙げられる。1911年頃からすでに、アルベール・グレーズやジャン・メッサンジェ、ル・フォーコニエといったキュビズムの芸術家たちはこうした着想に基づきみずからの芸術と伝統との関係性を主張している。だが第一次世界大戦を境に、キュビズムと特定の伝統とのつながりを主張するだけでなく、特定の国家の美術との断絶を主張する傾向が強く認められるようになる。このためにケネス・シルヴァーやクリストファー・グリーンは第一次世界大戦勃発以降のキュビズムと古典主義をつなぐものとして排他的ナショナリズムの重要性を指摘する。

だが本発表では、必ずしもそうした排他的なモデルに立脚しないキュビズムと伝統との関係について、第一次大戦勃発以降の言説に即し考察する。第一部ではまず、キュビズムの彫刻家レイモン・デュシャン=ヴィヨンの手稿に認められるベルクソン哲学との思想的交差を指摘しながら、絶対的な時間の存在の否定と「曲線」のアナロジーについて検討する。第二部では、パブロ・ピカソの1923年のインタビューをもとに「連続する鏡」としての美術史観を紹介する。こうした時間モデルは、国家という枠組みの中にキュビズムの系譜を閉じ込めるものではなく、むしろ時間的・地理的制約を超えて異質なものと連続する可能性を無限大に広げるものであった。第三部で検討するように、そうした時間モデルは、キュビズムに依拠しつつその理論を「純化」するピュリスムを提唱したアメデ・オザンファンの美術史観にも認められる。オザンファンが雑誌『レラン』の最終号表紙に掲載した「切らずに開いて (Ne coupez pas, dépliez)」という警句が示唆するように、彼らが古典的なものとのあいだに築き上げた関係は、折り曲げられた平面を開き異なる諸相を並置する営みと密接に結びついているのである。この三つの論点を踏まえることで、本発表では排他的なイデオロギーに立脚する古典主義とは異なるような前衛と古典の関係を築き上げた歴史モデルに光をあてる。

キーワード: キュビズム、レイモン・デュシャン=ヴィヨン、パブロ・ピカソ、アメデ・オザンファン

カルロ・カッラ プリミティヴィスムと古典主義のあいだ

池野絢子(京都造形芸術大学准教授)

イタリアにおいて芸術の秩序回帰の動向を先駆けたのは、ジョルジョ・デ・キリコをはじめとする、雑誌『ヴァローリ・プラステチ(造形的価値)』に集った芸術家たちであった。その一人、もともとは未来派の代表的な画家であったカルロ・カッラ(1881-1966)は、1916年に「色調や線の関係が持つ単純明快さ」にこそ近代性が現れると述べ、その模範を初期ルネサンスの絵画のなかに見出すようになる。表面的に見れば、前衛的な表現を捨てて秩序へと向かう第一次世界大戦後の芸術の動きを典型的に体現したかに思えるカッラの変遷は、しかし、順応主義的なものだったわけではなく、「伝統」と「近代性」を一致させようとする模索であった。本発表では、1915年から1919年までのカッラの推移を、プリミティヴィスムと古典主義という二つの様相から考察する。この二つの概念は、様式的観点からは通例相容れないはずだが、カッラにおいては、イタリア絵画の原理という「起源」を求める試みのなかで、むしろ連続的に実現されていった。このカッラの事例を通じて、第一次世界大戦前後のイタリアにおける前衛芸術と古典主義の、錯綜した関係の一端を明らかにしたい。

キーワード:プリミティヴィスム(プリミティヴィズム)、未来派、形而上絵画、『ヴァローリ・プラステチ(造形的価値)』

両大戦間フランス美術における危機と伝統

飛嶋隆信(東京農工大学准教授)

経済恐慌から独軍による占領に到る間、フランスにとり国内外の危機が連続した1930年代は、第一次大戦後の復古的風潮(「秩序への回帰」)が強まり、芸術史上も不毛な時代と見なされがちだった。しかし、歴史への意識が研ぎ澄まされ、混沌とした状況を乗り越えるための理念が芸術に求められた時代でもあったのだ。

当時、前衛との緊張関係を鋭く意識しつつ伝統回帰の姿勢を強めたのは、ルーヴル美術館の学芸員ルネ・ユイグや、ポーランド出身の美術批評家ヴァルデマール・ジョルジュである。特に後者は、前衛の擁護者として出発した後、ファシスト政権下のイタリアの具象画家達に共鳴、古代からルネサンスに到る伝統を再興すべく、汎ヨーロッパ芸術の構築を提唱した。

一方、機械と色彩の美を追求する画家フェルナン・レジェ、建築と都市の近代化を目指す建築家ル・コルビュジェ、伝統の硬直化に批判的な批評家ジャン・カスーらは、雑誌『ギリシャへの旅』に寄稿、モダニズムの視点から古代を見つめ直すことで、芸術の新たな可能性を模索した。

危機的状況下に芸術の意義を再確認するため、如何に「伝統」を参照するか—立場の違いを越え、この問いは同時代の言説を貫いていたのである。

シュルレアリスムと古典主義

木水千里（お茶の水女子大学グローバルリーダーシップ特別研究員）

20世紀前半のフランス前衛芸術においては複数のイズムが存在し、多くの宣言が発表されたように、既存の芸術的価値観との断絶や他の芸術グループとの差異化が重要であった。1924年にパリで誕生したシュルレアリスムもこの文脈において捉えられるだろう。しかしその一方、第一次世界大戦の前後に前衛芸術家たちが古典へと回帰するという傾向も見られた。

そこから本発表では、新古典主義を代表するドミニク・アングルの受容に注目し、相容れないと思われるこれら二つの芸術運動の関係を検証することを目的とする。古典に回帰する前衛芸術家たちは自然に向き合う態度においてアングルを評価していたが、シュルレアリスムが誕生する直前、後のシュルレアリストたちもまた『リテラチュール』誌の最終号でアングルの作品から着想を得たマン・レイの写真作品《アングルのヴァイオリン》を掲載したのである。さらに古典、あるいはそれを受け入れる当時の芸術運動に対するシュルレアリスムの態度を検証することで、古典について言及しながらも、決してそれのみに回帰することのないもう一つのフランス美術史形成の軌跡の描出を試みる。

キーワード:シュルレアリスム、マン・レイ、アンドレ・ブルトン

反-肖像画：ルネ・マグリットによる過去と現在の表象

利根川由奈(早稲田大学非常勤講師)

本発表では、ルネ・マグリットの《パースペクティヴ》シリーズの検討を通して、マグリットにとっての「古典」とは何かを明らかにすることを目指す。

マグリットの《パースペクティヴ》シリーズは、ジャック＝ルイ・ダヴィッド(1748-1825)、フランソワ・ジェラルド(1770-1837)、エドゥアール・マネ(1832-1883)の作品に描かれた人物を棺桶に置き換えてマグリットが再構築した絵画群を指す。本発表でこの作品群を分析対象とするのは、絵画に再現された時間、また絵画の生きる時間、に対するマグリットの考えがこの作品群から見て取れるためである。

美術史家のパトリシア・アリマーは《パースペクティヴ》シリーズについて、「過去の絵画への反抗」と「過去の絵画との連続性の強調」という、アンビヴァレントな様相を示すと指摘した。たしかに、過去の絵画に描かれた人物を棺桶に入れる身振りは「古典」的美術を葬る意図があるように見える。しかしその一方で、1950年代にあえて100年以上前の作品を作り変えて提示することは、過去の作品の持つ現代性を浮かび上がらせることにつながるように思われる。

予約不要 使用言語: 英語・フランス語・日本語
質疑応答のみ通訳あり。日英通訳: 張師豪(名古屋大学大学院)
Admission Free | Language: French, English and Japanese
Translation of discussions from Japanese to English : Zhang Shihao
支援: 科学技術人材育成のコンソーシアムの構築事業
Sponsored by Building of Consortia for the Development of Human
Resources in Science and Technology
後援: 日仏美術学会
Supported by Société franco-japonaise d'art et d'archéologie
問い合わせ先: 松井裕美(名古屋大学高等研究院)
Coordinated by Hiromi Matsui (Nagoya University)
Contact: hiromi.matsui[a]lit.nagoya-u.ac.jp

